

「箕面市 障がい児童生徒の生活実態アンケート調査」報告書 概要

平成 23 年 11 月

支援の必要な中高生の豊かな地域生活を考える会
スマイルシード



I. 調査目的

「放課後等デイサービス」(以下「放課後デイ」)が平成 24 年度から制度化されるが、箕面市内において本サービスが実施される目処は立っていない。(アンケート実施時点)

箕面市内への事業者の参入を促し、適切なサービスが提供されることの必要性を箕面市に訴えるため、この分野への今後の参入を検討している 3 事業者と、箕面市在住で支援の必要な小・中学生保護者の会(ゆうやけの会・つばさの会)の協力を得て、対象児童生徒の日中活動の現状と保護者の思い、サービスに対する具体的なニーズについて明らかにする。

II. 調査対象

- ・箕面市在住の府立支援学校(箕面支援・豊中支援)在籍児童生徒の保護者
- ・箕面市立小中学校 支援学級在籍児童生徒の保護者

III. 調査方法・期間

- ・選択肢及び自由記述回答によるアンケート
府立支援学校(箕面・豊中)在籍児童生徒の保護者は、あかつき福祉会の放課後教室と各校 PTA 行事等を通じて個別配布し、個人から郵送で回収した。
ゆうやけの会・つばさの会会員は、各校役員を通じて配布し、各校ごとに郵送で回収した。
- ・平成 23 年 7 月 4 日～7 月 31 日

IV. アンケート回収率

ゆうやけ： 79% (188/239) (在籍 240)
つばさ： 60% (33/55) (在籍 55)
箕面支援： 81% (34/42) (在籍 48)
豊中支援： 74% (26/35) (在籍 47)

全体： 76% (281/390) (在籍 390)

*参考

高校生部会：100% (3/3)

V. 調査結果

調査対象とした児童生徒の年齢の幅が広く、(小1～高3)障がいの状態も多岐に渡っていたため、こ

れまで経験してきたこと等の違いから、年代によって、福祉サービスの在り方に対して期待することへの差異が認められた。

しかし、子どもの成長や自立と家族の生活の充実のために「学校外での時間の過ごし方」についての保護者の関心と期待は、総じて高いということがアンケートの回答から明らかになった。

1. 現在ある福祉サービスや教育活動の

利用状況について

利用状況を見ると、障がいのある子どもの居場所・活動の場として、市立小学校に設置されている学童保育(府立支援学校児童も利用可)と市立中学校でのクラブ(サークル)活動が重要視されており、共にその存在の大きさを見ることができる。

また、子どもの年齢が低いほど、様々な活動集団の中で、力をつけるということに保護者は熱心で、期待度も高く、子どもの能力を高めるための療育的な要素を求める傾向が強い。

福祉サービス等についての認知度は、総じて支援学校で高く、実際に日中活動でのサービスの利用頻度が多いのも、このグループである。

2. 移動支援(ガイドヘルパーとの外出等)について

既存のサービスの中で、障がいのある子どもが、日中活動を行う上で重要なのが、移動支援(ガイドヘルプ、学校学童送迎等)である。子どもが成長するにつれ、自立や社会性を育むことの必要性を訴える声は大きくなるものの、実際、そのような目的で移動支援を利用している家庭は少ない。

移動支援利用経験者の利用理由として多くあげられたのが、きょうだい児のための時間を確保したり、就労のための時間を確保する等、障がいのある子ども本人の直接的なニーズというよりも、家庭や家族の事情からくる、本人支援の必要性への対応として、移動支援を利用しているという実態も明らかになった

サービス本来の目的から外れ、利用者それぞれが、ニーズを満たすために、使えるサービスを代用し生活をやりくりしている姿が浮かび上がる。子どもの自立に欠かせない移動支援サービスであるが、実際の利用には規制も多く、放課後活動の移動には、使にくいという声が多い。

また、「利用したいが手続きが分からない」、「契約

する事業者を自力で見つけるまでが大変」等の声が多く寄せられており、利用に至るまでのハードルが高いということを示している。

3. 現在の福祉サービスや生活の中で

困っていること

その他、生活で困っていることについての問い合わせでは、福祉サービスや関連情報をもっと分かりやすく教えてほしいという声が多数寄せられた。障がいのある子どもを育てるにあたっての「幅広い情報」と「必要な情報」の伝達が求められている。

また、既存の福祉サービスでやり繰りしながら就労することの困難さや、周囲との関わりの中において、障がいのある子どもを育てる・共に暮らすことの大変さ等、寄せられた声は多数ある。

4. 「放課後等デイサービス」について

日中活動への支援の関心の高さを反映しているのか「放課後等デイサービス」制度の認知度自体は全体の3割程度と、さほど高くはないものの、そのようなサービスを利用することについての漠然とした希望は、相対的に高く出ている。

（『はい』40%『わからない』43%）

一つの傾向としてみられることは、学童保育などの利用経験があり、放課後や長期休業中の子どもの居場所の確保が成された経験がある家庭において「放課後デイ」に対する期待やニーズが高い。

「放課後デイ」利用希望の理由としては、保護者の就労やレスパイトよりも、本人の自立や第3の居場所作りの方が多かった。

VI. 考察

アンケート結果から、社会的支援である福祉サービスが不足しているため、保護者の負担が非常に大きいということが明らかになった。また、社会的支援の不足を補うために、保護者の親（対象児の祖父母）や親族の援助に頼らざるを得ないという実状も垣間見られた。このことは、一種の「家族カプセル（身内のみで課題を抱えている）」の状況を意味していると思われる。祖父母の援助が得られるかは、一般家庭でも、保護者の就労が継続できるかどうかの大きな要因である。祖父母の援助のみに頼るのではなく、社会的支援としての福祉サービスを充実させ「脱・家族カプセル」を目指していく必要性があると考えられる。

子どもに障がいがあっても、地域で安心して充実した生活を送ることができることによって、健やかな成長発達につながり、その子なりの自立を目指すことができる。と同時に、家族の自立にもつながる

と考える。そのためには、使いやすい福祉サービスの充実とその絶対量の確保が欠かせない。福祉サービスは、必要な時に、必要な量が、必要な人に届くことが必須である。保護者が、福祉サービスを使うことの必要性の認識が薄かったとしても、子どもにとっては、何らかの支援と活動の場が必要である場合もあるだろう。

また障がいがあっても、中・高校生という生活年齢を踏まえた過ごし方ができるよう、学校での課外時間（長期休業中や放課後）のあり方について再考頂き、クラブ活動やサークル活動等への参加等、地域において居場所が確保され、様々な経験を通して周囲との関わりが広がり、地域で安心して暮らせるようになることを期待する。

今回の調査では、箕面市内在住の対象者全てにアンケート配布することができない状況があり、調査としての限界はあった。しかし、アンケート回収の過程で、サービスを必要としている状況にありながら、生活に追われて、時間的・精神的余裕がないために、回答を寄せることができなかった家庭の存在があったことも記しておきたい。

また、人とつながることに対して苦手意識があるなど、保護者同士のつながりが希薄な状況にある人にとっては、このアンケートの趣旨自体が伝わりきらなかったという懸念もある。

それでも回収率7割を越えて寄せられた回答からまず感じられたことは、子どもの将来を見据えた上で、今子どもにとって必要なことは何かを考えようとする保護者の願いと思いである。

行政にはこの保護者の願いと思いを受け止めて頂き、障がいのある子どもに対して必要な福祉サービスについての実態把握（ニーズ調査等）を継続的にを行い、不足分については、早急に補うようにしてほしい。

箕面市としての福祉施策の展望が明確になるように、Nプランや子どもプランなどの中で、目標数値を示し、その問題解決策について、具体的且つ早急に対応・提示してほしい。

また、福祉サービスの利用に関する説明会等を実施しサービスの認知も含めて、将来を見据えた、利用者側の準備を促すように協力願いたい。

VII. おわりに

紙面の都合上、自由記述については、内容の似たものをまとめて記載するようにした。従って、本報告書において回答者全員分の記述を掲載することはできていない。

今回のアンケートに協力頂いた方々に、心より感謝の意を表す。